

2019.12
(公社)富山県薬剤師会
広報誌

とみ やく 富 薬

12号

第41巻

No.365



シヨウヨウダイオウ *Rheum palmatum* L. (タデ科 Polygonaceae)

生薬

ダイオウ（大黄） 秋、播種から4年以上の大株を掘り起こし、根と皮部を取り去り、穴をあけてひもを通し、吊るして風乾する。

成分

アントラキノン：chrysophanol, emodin, rhein, alo-emodin, physcion などとその配糖体、sennidinA-F, rheidinA-C, palmidinA-D、タンニン：rhatannin I, II, d-catechin、ナフトレン配糖体など。

効能

緩下剤として単用または配合剤に用いられる。瀉下剤、高血圧症用薬、解熱鎮痛消炎薬、皮膚疾患用薬とみなされる漢方処方に配合される。



生薬 ダイオウ（大黄）

元富山県薬事研究所
薬用植物指導センター

村上守一氏 写真撮影

〇〇表紙について〇〇



『神農本草経』（1C-2C）の下品に収載され、また『名医別録』（502-536）に「大黄、大寒、毒無し。胃を平にし気を下し、痰実、腸間の結熱、心腹脹満、女子の寒血閉張（冷えて月経が止まり、腹部が張る）、小腹痛、諸の老血（瘀血）を除く。一名黄良。河西山谷（陝西省北部、甘肅省東北部、蒙古）及隴西（甘肅省東南部）に生ず。二月、八月に根を採り、火乾す」と薬効に加えて産地が明記されています。加えて陶弘景（456-536）は「現に益州北部の汶山（四川省）及び西山（四川省）で採るものは、河西、隴西の好きものようではないが、それでもやはり紫地に錦色があり、味は甚だ苦く渋く」と、また蘇敬（7C）は「宕州、涼州（甘肅省）、西羌（青海省）、蜀地（四川省）に産するものが皆佳く」と、主に陝西省、甘肅省、青海省、四川省を主産地と記しています。これらの地域は『十七改正日本薬局方』（2016）に収載されている*R. palmatum*（ショウヨウダイオウ）や*R. tanguticum*（タンゲートダイオウ）、*R. officinale*（薬用ダイオウ）の生息域と一致します。もう一種の*R. coreanum*（チョウセンダイオウ）は中国東北部から朝鮮半島北部に分布します。

ショウヨウダイオウは大型の多年草で、根茎部が肥厚した円柱形の頭部から多数の大型で肉質の長柄を有する根出葉を叢生します。葉身は径40cm以上にもなるほぼ円形で、3-7掌状深裂し上面は無毛、裏面は白毛に覆われます。6-7月に約2mにもなる花茎を上げ、大型の円錐花序は多数の淡赤色の小花を咲かせます。タンゲートダイオウは上記と非常によく似ていますが、葉身は40-70cmと大きく、掌状に深裂した裂片は狭く長く、再羽状浅裂し、先端は尖ります。大型の円錐花序は密に分枝し、小花は淡黄色。薬用ダイオウは上記二種よりやや小型で高さ1.5mですが根茎部は巨大になり、葉身は卵円形で40-70cmと大きく、掌状に浅裂します。円錐花序は大きく、小花は淡緑色から黄白色の小花を咲かせます。チョウセンダイオウの葉身は薬用ダイオウによく似ていますが、掌状に深裂します。花は濃赤色です。

日本においては奈良時代、正倉院の『種々薬帳』に納入時の天平勝宝8年（756）には「大黄九百九十一斤八両（約675kg？）并袋」と記録され、100年後の斉衡3年（856）には87斤13両2分（約60kg？）に減っていることから、よく用いられた重要な薬であったことが伺えます。昭和2年の秤量では完全に形を保っているものが14.625kgと薬塵16.687kgと更に減っています。この大黄は重質の金紋大黄であり、正倉院薬物第二次調査（1994-95）においてアントラキノン類やその配糖体、後にsennidinA-Fが発見され、その他の成分も単離されたことから、真正の大黄であり、中国から輸入されたと考えられます。平安時代の『本草和名』（918）、『物類品隲』（1763）に「和名抄オホシと訓ず。羊蹄（ギンギシ*Rumex japonicus*）、和名シと云う。此の物、羊蹄に似て大なり。故にオホシと云う。和産、狭小にして下品なり」と和名を述べ、『延喜式』（927）諸国進年料雑薬には武蔵国大黄二斤、越前国大黄廿六斤とありますが、この頃の国産が真正大黄とは考えられません。また江戸時代に伝わったとされるシベリア、中国東北部原産のカラダイオウ（*R. undulatum*または*R. rhabarbarum*）は『農業全書』（1697）に「大黄、是も医家に時々用ゆる薬種なり」の後、栽培法を記し、続いて「是山城の長池などにて作る唐の大黄たねなり。葉丸く厚くして、つは（ツワブキ*Farfugium japonicum*？）の葉によく似て、茎少しあかく甚だふとくさかゆる物なり。前々より有り来る倭大黄とは、根のかたち少し似て隔別なり」とあり、真正大黄とは別物ですが大黄として用いられていたようです。実際にショウヨウダイオウが国内に入った記録は昭和の初期にミュンヘン植物園から富山薬専に分与されたものが初めてで、北大農学部付属植物園で保存された株が現在でも「北海大黄」の名で栽培されています。（村上守一 記）